

# Hyperion における“Nature’s law”

吉 賀 憲 夫

## “Nature’s law” in *Hyperion*

Norio YOSHIGA

Keats shows us three stages in history in *Hyperion*: the first is the world which Titans conquered; the second, the world of Saturn; the third, the world of the Olympian gods. In *Hyperion* the change from the world of Saturn to that of the Olympian gods is depicted and the process pictured in Oceanus’ speech reminds us of Keats’ idea of human life.

He compared human life to a “large Mansion of Many Apartments” and the kingdom of Saturn corresponds to the second room, “the Chamber of Maiden Thought” where beauty is considered a supreme law. Although Oceanus thinks that the law of beauty is almighty in all periods of history, we find that beauty is no longer absolute for the Olympian gods in Book III. It may be said that he makes a serious mistake to believe that beauty is the principal law in every stage of history when he regards beauty as a “Nature’s law” and “eternal truth”. The idea of “Nature’s law” which implies the progress toward the perfect beauty is too romantic and naive to become the dominant law of *Hyperion*. The romantic view of Nature in Oceanus’ speech includes a factor which made *Hyperion* unfinished.

### I

キーツ(Keats)が叙事詩として構想した *Hyperion* は未完に終わった。その構想は *Endymion* の執筆中に既に芽生え、*Endymion* の出版の際に書いた序文には *Hyperion* の執筆を予告するような一文が含まれている。しかし彼は *Endymion* の完成後すぐにその作品に着手したわけではなかった。彼自身の *Endymion* に対する反省もあり、彼は慎重にその構想をねっていたのであろう。*Endymion* の執筆にあたっては、作品自体の中にも見い出せるように、彼はその執筆に一定の期限を付けていたし、また、若干の遅れはあったかもしれないが、規則正しくその計画は実行されたと言えるであろう。というのは当時のキーツにとって長篇を完成させること自体が一つの目的であったわけであり、また悪く言えば、彼はただ書き続ければ良かったのであった。*Endymion* の第4巻の結末におけるやや唐突なハッピー・エンディングも、その当然の帰結と言えるかもしれない。

キーツは叙事詩として *Hyperion* を書き始めた。もしこの作品が完成されていたら、それはどの様な作品になっていたのか興味深いところはあるが、未完である以上、その様な詮索は空しいものなのかもしれない。だがこの作品の展開がまったく予想のつかないことかと言えば、決してそうでもないのである。キーツの出版社の顧問という地位にあり、常に彼の詩を見守って来たウッドハウ

ス(R. Woodhouse)は次のように伝えている。

…the poem if completed would have treated of the dethronement of Hyperion, the former god of Sun, by Apollo—and incidentally of those of Oceanus by Neptune, of Saturn by Jupiter, etc., and of the war of the Giants for Saturn’s re-establishment—with other events, of which we have but very dark hints in the mythological poet of Greece and Rome<sup>1</sup>.

また、de Selincourt は次の様な展開を考える。

…Apollo, now conscious of his divinity, would have gone to Olympus, heard from the lips of Jove his newly acquired supremacy, and been called upon by the rebel three to secure the kingdom that awaited him. He would have gone forth to meet Hyperion who, struck by the power of supreme beauty, would have found resistance impossible.<sup>2</sup>

これらを単に批評家の勝手な想像として退けることは簡単であろう。しかし彼らも決して無責任なことを言っているのではないであろう。それはキーツが書き終えた 900

行あまりの中に、彼らをそう確信さすに足るものがあつたからに外ならない。それは何かと言えば *Hyperion* 第 2 巻中の Oceanus のスピーチであり、特に

'tis the eternal law  
That first in beauty should be first in might.<sup>3</sup>  
(*Hyperion*, II, 228—229)

という美の観点から権力の推移を見る歴史観であり、思想であった。しかし果してこの Oceanus の言葉は *Hyperion* 全体を支配する原理となり得るのであろうか。もしなり得るものであれば何故途中で放棄されたのであろうか。この作品の未完の理由はそう単純なものではないであろうが、その放棄の理由の一端は Oceanus のスピーチそのものの中にあるのではないであろうか。つまり Oceanus の美を基調とした進歩思想とも言うべきロマンティックな主張そのものの中に、この作品を破産に導びく要因があるのかもしれない。Oceanus の言う “eternal law” の根底にある “Nature’s law” はこの作品を導びく有効な理論となり得るのか。また何故 “eternal law” が没落する側の巨人族から発せられているのか。本稿においては Oceanus のスピーチを分析することにより、彼のスピーチの意味、及び未完 *Hyperion* の意味を考察してみたい。

## II

*Hyperion* は一種の世代交替劇であり、また権力機構の転換劇でもある。しかしその新旧の勢力の交替を支配するものは政治力、軍事力といったレベルのものではなく、美であるという点にキーツの独創があると言えよう。彼はこの作品において、最高の美へと向う進歩発展という図式を意図していたように思える。しかし彼は最高の美の支配する世界を提示しはしない。彼が描こうとしたのは美しい世界から、さらに美しい世界へと移行しようとする転換期であった。彼はその素材をギリシア神話にとった。そこでは世界が Saturn の支配から離れ、オリンポスの神々の支配を受ける様が描かれるわけだが、この支配力の推移は一つの神話的観点から見れば「黄金の時代」から「銀の時代」への移行を示すものであり、それは世界の墮落をも意味する。しかしキーツはそこに墮落とは反対の進歩という概念を提示しているという点に彼独自の神話解釈があり、また同時にそれが進化論的でもあり、楽観主義的な要素を持っているのは、彼の生きた時代の趨勢とも言えるであろう。

ロマン派の詩人たちは大なり小なりフランス革命の影響を受けている。ワーズワス (W. Wordsworth) や コールリッジ (S.T. Coleridge) がその革命に直接の関係を持った

のに比べれば、キーツはその余波の中に生きたと言えよう。フランス革命に対する英国の反応は、それへの警戒心のため、政治的には反動的にならざるを得なかった。また事実キーツにも当時の英国がそのように思えたのは、彼の次の手紙が語ってくれる。

It (French Revolution) put a stop to the rapid progress of free sentiments in England; and gave our Court hopes of turning back to the despotism of the 16[th] century.<sup>4</sup>

というのは彼には、“All civilized countries gradually more enlightened and these should be a continual change for the better”<sup>5</sup> という信念があったからである。またこの “a continual change for the better” という思想は、その後 19 世紀を支配する重要な理念の一つとなるのだが、この考え方が *Hyperion* の根底にあり、またそれが *Hyperion* の持つロマンティックな一つの要素となっている。

断片 *Hyperion* のあらましは以下の様に要約できる。戦いに敗れ、没落した巨人族の長 Saturn は深い谷間に眠っている。そこに *Hyperion* の妻 Thea が彼を傷つけた巨人族が潜む洞窟に案内するためにやって来る。Saturn は Thea に導びかれその洞窟へと急ぐ。第 2 巻は巨人族の会議の様子が描かれる。Saturn は彼ら巨人族の没落の理由を Oceanus に尋ねる。Oceanus は彼らの没落を歴史的必然性として捉え、その真実を受け入れることを要求する。Clymene は Oceanus の説の裏づけをする。これに対し Enceladus は第二の戦いを主張する。結論を得ないまま第二巻は終り、Apollo の神話を描く第三巻が始まる。そして Apollo の神化の瞬間を描いて *Hyperion* の筆は絶たれる。この間、巨人族で唯一の神としての権能を保持している *Hyperion* は、自分の没落の不吉な徴候を感じながらも、この作品の中ではまだ重要な役割を果たしてはいない。

*Hyperion* 中の 5 巻は、第二巻の Oceanus のスピーチであろう。彼のスピーチは Saturn の要請によるものである。Saturn は次の様に言う

Tell me, all ye brethren Gods,  
How we can war, how engine our great wroath?  
Oh, speak your counsel now, for Saturn’s ear  
Is all a-hungred. Thou, Oceanus,  
Ponderest high and deep; and in thy face  
I see, astonished, the severe content  
Which comes of thought and musing. Give us  
help!

(*Hyperion*, II, 160—166)

“all ye brethen gods”と巨人族一門に呼びかける Saturn には、もはや彼らが“Gods”ではないという事実が忘れられており、“how engine our great wroath?”と言う時、その“wroath”は当然オリンポスの神々に向けられている。この言葉を受け Oceanus は、彼らを没落に導びいたものはオリンポスの神ではなく“Nature’s law”であることを説く。

We fall by course of Nature’s law, not force  
Of thunder, or Jove. Great Saturn, thou  
Hast sifted well the atom-universe;  
But for this reason, that thou art the King,  
And only blind from sheer supremacy,  
One avenue was shaded from thine eyes,  
Through which I wandered to eternal truth.

(*Hyperion*, II, 181–187)

Oceanus は、巨人族は神という絶対的な存在ではなく、“Nature’s law”に支配され、従属するものと考え、従って Saturn を神ではなく“King”と呼び、彼の絶対性を否定する。

And first, as thou wast not the first of powers,  
So art thou not the last; it cannot be.  
Thou art not the beginning nor the end.

(*Hyperion*, II, 188–190)

彼は Saturn の絶対性の否定を聖書の言葉“I am Alpha and Omega, the beginning and the ending”をもじり、“Thou art not the beginning nor the end.”と言う。しかしこの言葉は単に Saturn が神でないことを主張しているのではなく、大きな観点から見れば Saturn のより正確な位置付けを行なっている言葉ととれる。つまり彼は“the beginning”でもなければ“the end”でもない。言うなれば、その始めと終りの或る一点のみ存在を許される過渡的存在なのである。故にその歴史的存在の意味がなくなる時、彼もまたその存在の必然性を失い没落しなければならない。Oceanus にとって絶対的なものは Saturn でもなく、また Jove でもなく、それは“Nature’s law”であった。ここでキーツが“Nature’s law”という概念を持ち出したことは一考の価値があるであろう。というのは、ロマン派の詩人にとっての“Nature”というものは、それ以前の詩人たちのそれに対する概念とは大きな隔りがあるからである。

Basil Willey は“Nature”に対する「歴史的」見方と「哲学的」見方との差を次の様に言う。

In the “historical” sense Nature means “things as

they now are or have become”, *natura naturata*; in the other sense, ‘things as they may become’ *natura naturata* … The ‘nature’ of anything may be conceived either as its ‘original’ state when fresh from the hands God and before it has acquired any ‘artificial’ accretions, or as its final state, when it has attained the fullest development of which it is capable, and realized most perfectly its own inner principle. All depends upon whether “Nature is regarded as a fixed state or something ‘evermore about to be.’”<sup>7</sup>

“Nature”というものを「完成された物」と見るか、「完成途上にある物」と見るか、という点に総てはかかっているのだが、“Nature”を「完成品」と見なす考えが18世紀合理主義を生み出したことは、まぎれもない事実であろう。

ロマン派の自然観と対極にある自然観は、自然や宇宙というものが、神の創造の手により完成され「時計」という機械に喩えられるような無機質の完成品という思想の上に立脚していたと言える<sup>8</sup>。そこでは神は大前提としてのみ存在し、神から切り離された自然に科学や哲学のメスが入られたのであった。ニュートン(Newton)に代表される古典物理学は、そのような土壌の上に飛躍的な躍進を遂げ、Alexander Pope は次の様にニュートンを讃える。

Nature and Nature’s laws lay hid in night:  
God said, *Let Newton be!* and all was light!<sup>9</sup>

ニュートンは中世という暗黒の夜の帳の中に隠されていた“Nature”及び“Nature’s laws”を理性という光で照し出した人間として捉えられているが、ここに表われている“Nature”は「無機質の完成した自然」であり、“Nature’s laws”はその複数形で示されているように物理学の諸法則を意味する。しかし *Hyperion* において Oceanus が言う“Nature’s law”は単なる物理的法則といったものではなく、もっと大きな力であり、自然を創造した神の意志をも感じさせるものがある。一般的に言って、ロマン派の自然観は自然を発展状態にあるものとして捉えたものであり、その結果当然の如く「成長」ということに自ずと関心が集まることになる。ワーズワスの *The Prelude* の副題は“Growth of Poet’s Mind”であり、コールリッジの *Biographia Literaria* も「自叙伝」という個人の成長の跡を記したものであることを考える時、いかに「成長」という概念がロマン派の詩人たちに強い影響を与えてい

たかが理解出来るであろう。言うまでもなくキーツの *Hyperion* も一つの「成長」を扱った作品なのである。

### III

Oceanus は彼のスピーチの中で“Nature’s law”とはどのような原理なのか、また世界はいかに成長して来たかを具体的なイメージを通して語り始める。先に引用した“Thou art not the begining nor the end”という聖書を下敷にした言葉を受けてのため、そこには聖書的なイメージが連なる。

From chaos and parental darkness came  
Light, the first fruits of that intestine broil,  
That sullen ferment, which for wondrous ends  
Was ripening in itself. The ripe hour came,  
And with it light, and light, engendering  
Upon its own producer, forthwith touched  
The whole enormous matter into life.  
Upon that very hour, our parentage,  
The Heavens and the Earth, were manifest;  
Then thou first-born, and we the giant race,  
Found ourselves ruling new and beauteous realms.  
(*Hyperion*, II, 191-121)

しかしあまりにも聖書的、言い換ればキリスト教的な天地創造を描けば、そこには必ずから神によって「完成された自然」を描くことになるであろう。そのことを恐れたのであろうか、キーツは現在の190行と191行との間に

Darkness was first and then a light there was;  
Fome Chaos came the Heavens and the Earth  
The first… grand Parent

という聖書の「創世紀」を思わせる三行を書いていたのだが、それを削除し、現在の形にしている。キーツは聖書やミルトン(Milton)の *Paradise Lost* を暗示させつつも巧みに「成長する自然」の神話を語ろうとしているのである。

先に挙げた第二巻 191 行から 201 行の引用で注目すべきことは、191 行目の“parental”, 198 行目の“parentage”, そして削除された行に見られる“Parent”という語に意味される「親」というイメージである。そしてそれらのイメージを受けて“born”という語が表われる。すなわちここでは、親から子へという世代交替のイメージ、言い換れば生物的、有機体的連続という観点から天地創造が語られ、無機質の機械としてではなく、生命体としての自然が描かれようとしている。

有機体として自然を見るのはロマン派の特徴であり、そこに表われる metaphor は、それ以前の「機械」というようなものではなく、それは例えて言えば「樹」であるという<sup>10</sup>。それは Oceanus のスピーチにもよく表われている。Oceanus は巨人族を“forest-tree”に喩え、彼らが世界の支配者となり、続いて彼らを支配者とした同じ理由が彼らを没落に導く様を次の様に語る。

Say, doth the dull soil  
Quarrel with the proud forests it hath fed,  
And feedeth still, more comely than itself?  
Can it deny the chieftom of green groves?  
Or shall the tree be envious of the dove  
Because it cooeth, and hath snowy wings  
To wander wherewithal and bind its joys?  
We are such forest-trees, and our fair boughs  
Have bred forth, not pale solitary doves,  
But eagles golden-feathered, who do tower  
Above us in their beauty and must reigh  
Inright therefn.

(*Hyperion*, II, 217—228)

Oceanus は自然の成長の過程を大地に育つ森の樹々に喩える。引用の前半は修辭疑問文が並べられ、後半は前半で暗示された成長の必然性というものが、より具体的に示されるのだが、それを少し詳しく見てみよう。まず“dull soil”と“forest”という関係が示される。これは美的観点から言えば、単なる「土」よりもその上に成長する「森」の方がより美しく、より高次の次元として捉えられる。次に“dove”が現われる。それは「土」に森が育った様に「森」により美しい高次の美が誕生することを意味する。この自然の成長発展の方向は必然性を有するものであり「争う(quarell)」ことの出来ない、また「否定(deny)」することの出来ない真実であると言う。前半の修辭疑問文に表われた“forest”, “tree”, “dove”というイメージは後半において複合され、より明確な意味付がされる。前半における“forest”と“tree”は総合、集約され“forest-trees”となり巨人族の象徴となる(1.224)。また前半における“Snowy wings”を持った“dove”は後半においては“eagles golden-feathered”となり、より強力な「美」と「力」を兼ね備えた存在、すなわちオリンポスの神々の象徴となる。Oceanus は豊かな自然のイメージを用い、自然の発展成長を語ったのち、それを一つの理論、法則として次の様に表現する。

'tis the eternal law  
That first in beauty should be first in might;

Yea, by that law, another race may drive  
Our conquerors to mourn as we do now.

(Hyperion, II, 228—341)

彼は自然の発展成長の中に“eternal law”を読み取るのだが、これは彼が最初に言った“Nature's law”を指し、また 187 行目で言う“eternal truth”をも指すものであることは確かだ。“Nature's law”から“eternal truth”を経て、結論的な“eternal law”へ至る彼のレトリックは周到なものがある。しかし、彼が“Nature's law”の名の下に示したところには確かに自然の成長の明確なイメージを見ることが出来たし、またそこに没落する巨人族にとっての「慰め」をも見出すことが出来たと言って良いだろう。何故なら、そこには巨人族を没落に導くオリンポスの神々は“A power more strong in beauty, born of us”<sup>12</sup>と表現されている様に、彼らは巨人族から生れたのであり、言い換れば巨人族の美を継承した存在なのである。巨人族の時代からオリンポスの神々の時代へと世代は変わるが、そこには親から子へという有機的な関係の上に、美というものが継承され、成長して行くのであり、それは滅びて行くものにとって大きな「救済」となる。しかし Oceanus が“eternal law”として集約した法則，“first in beauty should be first in might.”という言葉はそのような、「慰め」や「救済」を感じさせはしない。そればかりか、その後が続く二行，“Yea, by that law, another race may drive/Our conquerors to moan as we do now.”は「弱肉強食」ならぬ「弱美強食」といった自然界における冷酷な生物間の闘争を暗示し、実りある自然の成長と言うよりも、むしろ悲惨な現実の姿が浮び上って来る。それはまるでキーツがレイノルズ(J.H.Reynolds)に宛てた書簡詩の中で描いた弱肉強食の世界を想い起させる。

I was at home,  
And should have been most happy, but I saw  
Too far into the sea—where every maw  
The greater on the less feeds evermore...  
But I saw too distinct into the core  
Of an eternal fierce destruction,  
And so from happiness I far was gone.

(To J.H. Reynolds, Esq. 11. 92—98)

詩人は自然の中に、強大なものが弱小のものを滅して行くという“an eternal fierce destruction”を発見する。この永遠の破壊も残酷ではあるが一つの自然の法則であることに変わりはない。“Nature's law”の延長線上にある“eternal law”は、それが窮極の美の世界を志向していることを除けば、その現象面に表われることは、よ

り美しいものが、そうでないものを破壊するということ、すなわち大が小を食うということとなんら変りがないと言えよう。それは窮極の美というものが理念としてしか存在しない“Natures law”自体の限界とも言える。

Oceanus の“Nature's law”とは、美の成長発展を説く理論である。それは唯美的であり、彼は美に総ての価値を置く。“first in beauty should be first in might”という主張はロマンティックではあるが、現実感に乏しく、またいささかナイーヴな思想であると批評されてもしかたないかも知れない<sup>13</sup>。しかし美に最高の価値をおく Oceanus の思想は彼自身の弱点ではなく、彼を含む没落しなければならぬ巨人族自体の限界なのである。

キーツは手紙の中で、人生を多くの部屋を持った大邸宅に喩え、その第一室を“the infant or thoughtless Chamber”, 第2室を“Chamber of Maiden Thought”と規定し、その時のキーツは第二室から第三室へと続く暗い廊下に位置付けている。これを Oceanus の“Nature's law”に当てはめて考えるなら、第一室は“Chaos”の支配する世界であり、第二室は Saturn の支配する世界と考えられる。彼は第二室を

...we no sooner get into the second Chamber,  
which I shall call the Chamber of Maiden  
Thought, than we become intoxicated with the  
light and the atmosphere, we see nothing but  
pleasant wonders, and think of delving there for  
ever in delight.<sup>14</sup>

と規定する。一言で言えば“Sleep and Poetry”において最初に詩人が経験する官能美の世界であると言うことが出来る。Saturn の支配する時代が黄金期であり、一済の苦悩と無縁であった世界だとすれば、そこでの価値観は美に基づくものだけであったとしてもおかしくはない。その Saturn の世界に暗い影が差し込む。

...the world is full of Misery and Heartbreak,  
Pain, Sickness and oppression—whereby this  
Chamber of Maiden Thought becomes gradually  
darken'd and at the same time on all sides of it  
many doors are set open—but all dark—all  
leading to dark passages— We see not the  
ballace of good and evil. We are in a Mist.<sup>15</sup>

自然の法則は巨人族を第二室の支配者としたのだが、新しい支配者の前に Saturn の世界は終りを告げなければならない。しかし、Oceanus は第二室を支配した法則が第三室にも適応されると考えた。すなわち、美という観点

においてのみ成長を考えたのである。そこに第二室の支配者としてしか君臨出来ない巨人族の宿命があり、限界があると言えよう。というのは、巨人族に代り、世界を支配するオリンポスの神々は単に巨人族より美しいだけでなく、巨人族に欠けていたものを持っていたからである。それは、第三巻における Apollo の神化によって明らかにされる。そこにおいては、既に十分美しい Apollo はそれでもなお神ではなく、彼は“Knowledge enomous”を得て真に神となるのであった。

Knowledge enormous makes a God of me.  
Name, deeds, legends, dire events, rebellions,  
Majesties, sovran voice, agonies,  
Creations and destroying, all at once  
Pour into the wide hollws of my brain,  
And deify me, as if some blithe wine  
Or bright elixir peerless I had drunk,  
And so become immortal.

(*Hyperion*, III, 113—120)

巨人族に代り主権の座に着くオリンポスの神々の世界においては、美は当然のこととして、知識というものが重要な役割を果すことになる。美と知識という観点からキーツの一生を見る時、この両者は絶えず彼の心の中に去来していた。時には美への愛が彼を圧倒し、また時には知識への欲求が頭をもたげたのであった。“O for a Life of Sensation rather than of Thoughts!”という主張と、“An extensive knowledge is needful to thinking people—it takes away the heat and fever, and helps, by widening speculation, to ease the Burden of the Mystery”<sup>17</sup>という想いが彼の中に同居していた。しかしこの両者は彼の心の中で分裂状態を起していたわけでもなく、いつの日か両者が総合止揚されることを彼は願っていたのであろう。少なくとも *Hyperion* における Apollo には、その様な願いが託されていたと想像出来る。Douglas Bush は Oceanus の展開したスピーチを「若いキーツ」の所産とし、Apollo の神化を描こうとした彼は「成熟」したキーツであったと言うが<sup>18</sup>、この見解は重要であり、また正鵠を射たものであると言えよう。

*Hyperion* において Oceanus の展開したスピーチは果して何であったのだろうか。*Hyperion* が完成していない以上、彼のスピーチの正確な位置付けは不可能である。しかし、彼のスピーチが *Hyperion* 全体の理論的支えになるかどうか、という点においては疑問が残るであろう。Bush の言う様に、それが「若いキーツ」の所産であることに間違いはなく、またこのスピーチが没落する巨人族に慰

めを与えるためのものであり、詰まる所、敗者の理論でしかないというところに、このスピーチの本来の意味があると見えよう。

#### IV

キーツは *Hyperion* において先見の明を持った神の行動を描くことを意図していた<sup>19</sup>。しかし未完に終わった 900 行の中に、彼は遂に神を描くことが出来なかったと言って良いだろう。彼が書き得たものは、没落してゆく巨人族であり、まさに神になった瞬間の Apollo であった。神の座から追れた巨人族の苦悩はもはや神の苦悩でもなく、それは人間のそれと変る所がなく、また唯一人没落から免れている *Hyperion* も、彼自身に迫り来る不吉な没落の影を感じつつも、先見の明のある神として行為してはいない。キーツの *Hyperion* 創作の意図はまだ何一つ実現されないまま、未完と終わってしまったのである。

しかし *Hyperion* の未完の意味を逆に考えて見れば、当所のキーツの意図、すなわち神の行為を書く、ということ自体に彼が興味を失ってしまったとも考えられる。Oceanus の“Nature's law”及び“eternal law”から推理出来ることは、オリンポスの神々もまた絶体的な存在ではなく、彼らもまた巨人族と同様“Nature's law”の支配を受ける存在であるということである。オリンポスの神々が窮極の美を象徴するという保証がない限り、Oceanus の予言の如く彼らもまた没落しなければならぬ。Oceanus の“Nature's law”は理想の美の世界へと向かって進歩発展するという思想の上に成り立っているのだが、理想の美の世界が明確に設定されない限り、何処に存在するか解らない絶対的な美の世界の前に、諸々の美の世界の一済が相対化されてしまうことになる。その時、その様な相対化された世界での神の行為を描くことに何の意味があるのだろうか。キーツは *Hyperion* の構想を述べた手紙の中で *Hyperion* と *Endymion* の性格の違いを、*Endymion* は人間であり、環境に作用される存在であったとし、*Hyperion* における Apollo は先見の明を持った神として描くことを宣言している<sup>20</sup>。しかし Oceanus のスピーチが *Hyperion* 全体を支配する理念であると仮定すれば、Apollo と *Endymion* に、また *Hyperion* と *Endymion* との間にどんな差があると言えようか。彼は環境に支配される Apollo を描く必要はなかったし、ことさら第二の *Endymion* を書く必要もなかった。

キーツは *Hyperion* の展開を暗示さすべく書いた Oceanus のスピーチで、この作品自体を破産に導く羽目になったのではないであろうか。「成長途上にある自然」という大変ロマンチックな自然観に基づいた Oceanus

のスピーチは、そのロマンティックな理論ゆえに、二つの勢力間の葛藤を描くべき叙事詩としての *Hyperion* の緊張感を喪失させてしまったと言える。第二巻までの叙事詩的なトーンと打って変り、第三巻は *Endymion* のトーンに戻っているという事実は<sup>21</sup>、キーツの *Hyperion* に対する態度の変化を物語っていると言えよう。もはや彼にとって *Hyperion* を叙事詩として描くことは出来なくなったのであり、もし書き続けるとすれば別の表現形式でしか書くことの出来ない主題となってしまったのであろう。そこに新たに *The Fall of Hyperion: A Dream* というもう一つの *Hyperion* が書かれる理由があったのであり、また同時に最初の *Hyperion* が未完となる理由も存在すると考えられるのである。

## 注

- 1 E. de Selincourt ed., *The Poems of John Keats*(Methuen, 1926), p.486.
- 2 *Ibid.*, p.488.
- 3 *Hyperion* からの引用はすべて M. Allott ed., *The Poems of John Keats*(Longman,1970) を使用.
- 4 H. Rollins ed., *The Letters of John Keats*, 2vols. (Cambridge, Mass. : Harvard University Press,1958), II 193.
- 5 *Ibid.*,II, 193.
- 6 Revelation. i.8.

- 7 Baisil Willey, *The Eighteenth Century Background*(London : Chatto & Windus,1940), p.205—206.
- 8 *Ibid.*, p.5.
- 9 Alexander Pope, “Epitaphs.Intended for Isaac Newton”.
- 10 Morse Peckham, “Toward a Theory of Romanticism,” *PMLA*, LXVI (March, 1951), p.10.
- 11 言うまでもなく eagle は Jove の使者である.
- 12 *Hyperion*, II, 213.
- 13 E.E. Bostetter, *The Romantic Ventriloquists* (University of Washington Press, revised edition, 1975), p.154.
- 14 *Letters*, I, 281.
- 15 *Ibid.*, I, 281.
- 16 *Ibid.*, I, 185.
- 17 *Ibid*, I, 277.
- 18 Douglas Bush, “Keats and His Idea” in *English Romantic Poets*, ed. M.H. Abrams (London:Oxford University Press, 1960), p.334.
- 19 *Letter*, I, 207.
- 20 *Ibid.*, I, 207.
- 21 Herbert Read, *The True Voice of Feeling* (London: Faber and Faber, 1947), p.69.

(受理 昭和 55 年 1 月 16 日)